東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2008 年 1 月 4 日

聖預言者ユースフ

小さな規模で考えると人間にとってよくないことのように思える出来事も、大きな規模で考えるならどれほど人にとって有益となるか、ということへの論拠がクルアーンには非常に多く存在します。今日はこれらの論拠のうちの一つ、クルアーンでその話が詳細に語られている預言者ユースフについて言及してみたいと思います。

ユースフの物語はほとんど全ての人が知っているでしょう。簡単にまとめるなら、父親によってとても愛されていた預言者ユースフは、嫉妬した兄弟たちによって井戸に投げ入れられます。兄弟たちは父に、彼はオオカミに食べられたとうそを言うのです。しかし神の意志によって彼は井戸から救われ、その後大臣の地位にまで彼を高められました。何年もたって、飢饉が続き苦しんだ兄弟たちは、そうとは知らずにユースフから、エジプトの大臣から援助を求めます。そしてやっと真実を知って後悔するのです。

この逸話を使えるクルアーンのことばの下には、底流のように深いところを流れている一つの真実があります。第６７節で表面に現われるその真実は、「裁定は、只アッラーに属する。」というものです。これらの出来事の理解は、どの観点で見るかということに深く結びついています。ユースフを、裏切り者の兄弟たちの視線から見るなら、同情すべき存在と見えるでしょう。しかし同じ人をアッラーの観点から見るなら、うらやましいと思われるような状態となったというように見えるでしょう。時には真実を、ユースフの例のように、そこで見られている本人自体もしらず、ただ「見ている存在」のみが知るのです。従って、「見ている存在」が得ている知識を得るためには、彼が見ているところから、すなわち「外から」見る必要があるのです。例えば、あなたは井戸に投げ入れられた人だとします。重要なのはあなたの知性が井戸の中に閉じ込められないようにするということです。もしあなたの知性が全ての機能を実行できているなら、あなたが陥ったその状態は、用心深くあるための一つの機会とも言えるでしょう。

ユースフ章が下された時、預言者ムハンマドが陥っておられた状況は、まさにここで述べたようなことを正しいと示していました。この章はヒジュラの２年前に下されたものです。つまり最も困難な年、悲しみと痛みの年でした。マッカの社会は預言者ムハンマドからどのように逃れようかと考えていました。ちょうどユースフの兄弟たちのように、預言者ムハンマドの「兄弟」たちも背信行為の容易をしていました。

預言者ユースフのこの出来事が起こったのは紀元前１８９０年ごろです。預言者ムハンマドに、ご自身よりも２５００年前の時代に起こった出来事が説かれ、慰められているのです。最後の裁定はアッラーのものであるとして、この章が呼びかけている対象には、マッカの社会も含まれています。彼らに与えられているメッセージは明らかです。ユースフの裏切り者の兄弟たちの結末を忘れてはいけない、そしてアッラーはあなた方が考えているように、あなた方と関係のないところに存在するのではない、生の中心にあられるのだ、あなた方はアッラーの書かれたシナリオの中の悪役を選んでいるのだ、しかし最後にはユーススの裏切り者の兄弟たちのように地に倒れ、後悔することになるだろう、と。

結果としてそれらは実現しました。しかもずっと後になってからではなく、その１０年後にはマッカへ、祈りと涙と共に、預言者ムハンマドは入られたのです。カーバの前で、自分たちについて下される判決を待つ「裏切り者の兄弟たち」に預言者ムハンマドは尋ねられました。「あなた方に対し私が何をすると考えているのか。」彼らは答えました。「あなたは徳をもった父から生まれた徳を持った子です。あなたからはよいことのみが待たれるでしょう。」預言者ムハンマドも、ご自身から待たれた事を行い、そしてちょうどユースフがその兄弟に言ったようなことをおっしゃられました。「さあ行きなさい、あなた方は皆自由だ。」